研究課題　武田流弓馬故実の形成過程に関する史料学的研究

研究経費　五五万円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　阿部能久（聖学院大学人文学部・准教授）

　所内共同研究者　高橋慎一朗・林晃弘

　所外共同研究者　大澤泉（鎌倉歴史文化交流館・学芸員）・石井千紘（鎌倉国宝館・学芸員）

研究の概要

（１）課題の概要

　流鏑馬・笠懸・犬追物などの騎射の武芸は、鎌倉時代の武士の鍛錬手段として広く行われたものであるが、室町時代以降は衰退に向かい、江戸時代に入って弓馬故実として再構成された。とりわけ流鏑馬は、現代まで伝承されて各地の神社祭礼などの際に執行され、国際的にも関心が高い。現代に伝わる流鏑馬などの弓馬故実は、主に武田流と小笠原流に大別され、鎌倉時代から続く鶴岡八幡宮の流鏑馬においても、両流によって流鏑馬の奉仕がなされている。しかし、戦国時代から江戸時代にかけて展開した弓馬故実の形成過程はかなり複雑であり、いまだ明確にされてはいない。  
本共同研究は、鎌倉の金子家に伝来した学界未紹介の武田流弓馬故実書群の目録作成と原本調査による奥書の分析を通じて、その史料群としての性格を明らかにし、中世から近世にかけての弓馬故実の形成・伝承過程と、現代鎌倉を代表する伝統行事である流鏑馬故実の歴史的系譜を解明することをめざすものである。

（２）研究の成果

　金子家敏氏所蔵史料の調査により、武田流が伝承された初期熊本藩の築城に関わるやりとりや、江戸時代に江戸城内でおこなわれた騎射の詳細が判明した。